

岩井俊雄アーカイブ&リサーチ

特定非営利活動法人コミュニティデザイン協議会

概要

1980年代半ば以降、日本を代表するメディアアーティストとして国際的に評価の高い岩井俊雄の作品に関連する資料の整理とデジタル化を進め、それを広く公開することを目指す。近年は絵本作家としても知られる岩井は、アートにとどまらず、テレビ番組、ゲーム、CGアニメーション、電子楽器の制作など幅広く活動し、文化庁が推進する「メディア芸術」の領域を横断する重要なアーティストである。その功績と次世代へ与えた影響が高い一方で、現在は彼のメディア芸術に関連する作品を知る機会がほとんどない。また、美術館など文化施設に作品や資料がまとまって保管されておらず、岩井個人が管理しているため、資料アクセスが難しく研究が進まない状況である。2021年より岩井が保管する資料の調査に着手したが、資料価値の高い映像記録の確認が困難であるうえ、作品に使われたコンピューターが起動しないものもあり、資料調査とそのデジタル化、古いコンピューターやハードディスクに保管されているソフトウェアのソースコードなどデジタルデータのレスキューが急がれる。

アートから産業までメディアアートがますます注目されるなか、現代のメディア表現が、過去のアーティストらの実験的な活動の延長上にあることを理解することは重要である。かつて、1980-90年代のデジタル技術の発展と並行し、オールドメディアに対する独自の解釈とニューメディアの技術的革新性の両方を表現へ取り込んだ岩井の作品資料を広く公開することによって、作品の再制作や再評価へつなげることは、次世代の創造活動とメディア芸術領域の発展を促すと考えられる。

体制／手法

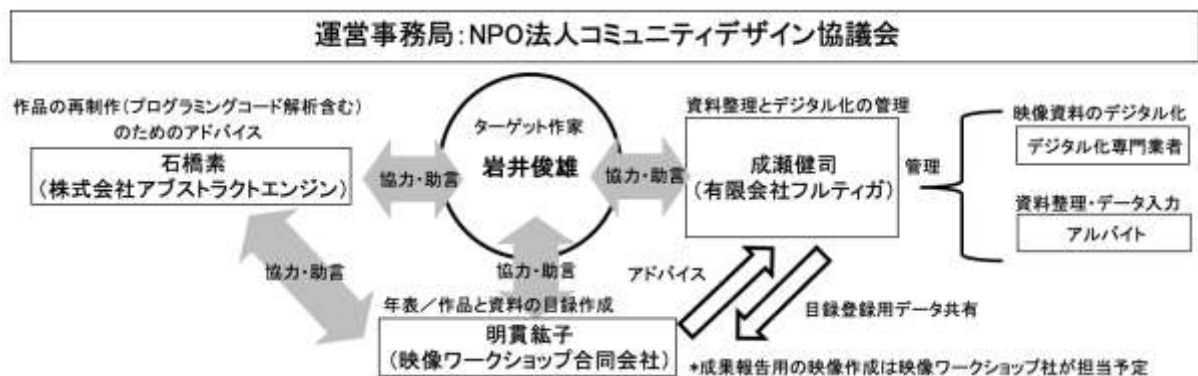
これまでメディアアートの資料整理やアーカイブプロジェクトに取り組んできた明貫紘子（映像ワークショップ合同会社代表）と岩井俊雄が共同で、2021年に立ち上げたプロジェクト「岩井俊雄アーカイブ&リサーチ」をベースにして、下記の内容を5カ年計画（2021-2025年）で実施することを予定している。本事業では、基本的に岩井が個人的に保管する資料を扱う。

1. 資料整理の枠組みとなる活動年表および作品の目録作成
2. チラシ、カタログ、設計図、メモ、執筆テキスト、展覧会レビュー、インタビューなどの関連する紙資料のデジタル化
3. 映像および音声記録されたマグネティックテープのデジタル化
4. 写真（紙焼きおよびフィルム）のデジタル化

5. 作品に使われたソースコードやビジュアル素材などデジタルファイルの整理と解析（現行機種でも動作するように改変することも想定）
6. オリジナル資料およびデジタル化した資料の目録作成
7. デジタル化した資料の公開（オンライン、書籍など）
8. 作品の再制作や再展示を想定した資料の活用とガイドライン作成

1)と2)は、一部着手済み。1)と6)は、岩井と明貫（映像ワークショップ）を中心にして実施する。2)3)4)は、資料保管場所に作業スペースを設けて、アルバイトスタッフらとナンバリングや棒リスト作成しながら基本的な資料整理を実施した後、デジタル化作業（外注も含まれる）を予定。資料整理とデジタル化作業の管理は成瀬健司（フルティガ）が実施する。5)は、石橋素（アブストラクトエンジン）らの協力を得て実施する。7)と8)の実施体制については必要に応じて今後、随時検討していく。全体の事業管理は、特定非営利活動法人コミュニティデザイン協議会が担当する。

令和4年度は、作品《映像装置としてのピアノ》（1995年）の再制作に平行して、関連する紙資料と映像資料の調査を実施し、映像資料のうち重要度と緊急性が高いと考えられるビデオテープ（ベータカムとU-matic）のデジタル化を実施した。



成果

1. 令和4年度の成果物
 - 作品《映像装置としてのピアノ》（1995年）再制作
 - 作品《映像装置としてのピアノ》に関する作家インタビュー映像
 - 映像作品および記録映像のリスト+サムネイル画像
 - 映像作品および記録映像のデジタルファイル
 - 活動年表（1981-2022年）
 - 作品目録（1981-2022年）



(左) 《映像装置としてのピアノ》の展示風景（茨城県近代美術館）

(右) 《映像装置としてのピアノ》のインストール風景（茨城県近代美術館）インストール時の映像記録を実施した。



映像資料は全てナンバリングし棒リストを作成

2. 公開方法

- 再制作版《映像装置としてのピアノ》が個展「どっちがどっち？いわいとしおX岩井俊雄 100かいたでのいえとメディアアートの世界」（茨城県近代美術館、2022年7月2日～9月19日）において、関連資料とともに公開された。



展覧会チラシ

- 《映像装置としてのピアノ》をめぐって、オリジナルと再制作版それぞれの制作プロセスを関連資料や技術背景とともに振り返るオンライン・トークイベント（ZoomまたはYouTube Live）を2023年2月23日に実施。

3. 課題

- アナログビデオのデジタル化にあたり、想像以上に劣化が進んでおり、事前の熱処理やクリーニング、修理などのために想定をはるかに上回る費用がかかることが分かった。また、プレビュー時点でテープが切断してしまうリスクがあり、デジタル化をすべき映像資料を選定すること自体が困難な場合がある。



(左) U-maticテープがプレビュー中に切断。修理やクリーニングなどには、デジタル化費用よりも高額な費用がかかる場合がある。

(右) テープに付着したカビ。事前チェックでの目視では分からず、テープを再生してみて見つかる場合もある。

- ソフトウェアのアップデート作業は作家本人しかできない箇所が想定されるため、後世に伝えていくためにどうすればよいか検討する必要がある。
- 《映像装置としてのピアノ》の再制作にはソフトウェアのアップデートが必要であったが、作家本人が保存していたコンピューター上に当時の開発環境とソースコードが残っていたおかげで、スムーズに実施することができた。しかし、将来的に開発環境の維持に関する課題が残る。

4. 文化的・社会的・経済的な意義

- 今後起こりうる、同様なメディアアート作品の保存問題の対処方法について事例を示すことができた。
- 茨城県近代美術館での岩井俊雄個展において、過去のメディアアート作品を展示したことによって再評価の機運を高めることができた。さらなるメディアアート作品の再制作の可能性が高くなった。